

里山の環境に関心を寄せる人が増えています。今回のセミナーでは、歴史的な視点から今日の里山の状況をとりえ、里山が抱える問題と課題について発表しました。

最初に富樫 均が「高原型の里山の環境変遷～縄文時代から現代まで～」と題し、多様な里山の姿のなかで、とくに信州の里山に特徴的なタイプの一つである“高原型の里山”の変遷をとりあげました。発表では、飯綱高原の湿原堆積物に含まれる花粉化石の組成を解析し、過去数千年にわたる高原の環境変遷を考察した結果を述

べました(図1)。それによれば、飯綱高原の自然環境に人の影響が大きくあらわれてきたのが今から約3000年前にさかのぼること、また約700年前頃には人為的な焼き払いによる森林破壊がもっとも激しくなり、森林にかわって草原的な環境が最も大きく広がったことなどが推定されます。このように、縄文後期から現代まで、里山の環境が何度も大きく変化してきた様子が示されました。

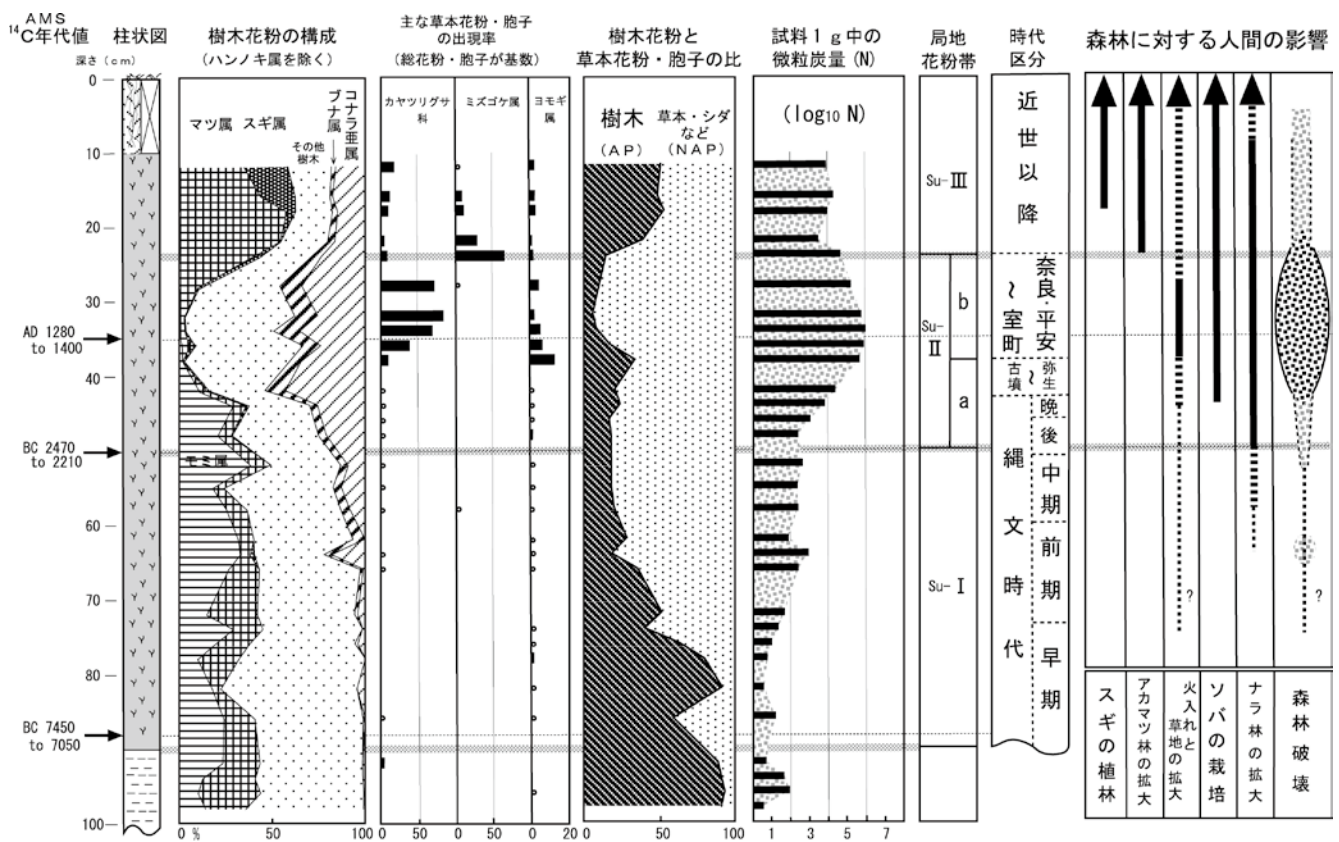


図1 飯綱高原の縄文期以降の植生変遷と人の関わり(富樫ほか 2004)

次に畑中健一郎が「戦前の信州の里山の暮らしから」と題し、県内16地域で行った聞き取り調査結果をもとに、かつての里山の暮らしについて発表をしました。かつての里山の暮らしは、地域の自然環境に大きく依存して営まれており、人々は食べ物や燃料をはじめ、生活に必要な多くのものを周りの自然を巧みに利用することで得ていたことがわかります。そして、当時の子どもたちの日常の暮らしやさまざまな遊びの様子等についても

紹介されました(表1)。また、それを通して、かつての里山の自然や景観が、今はずいぶん異なっていたことや、戦後の高度経済成長期を経て、人の暮らしの変化とともに里山環境が大きく変化したことがわかります。その結果として、今日過疎化や高齢化が進み、耕作放棄地の拡大や森林の手入れ不足、野生動物による農林業被害や里山に特有の生物種の減少などさまざまな問題が起こっているといえます。

表1 戦前の子どもたちの多様な遊びの場(畑中)

遊びの場

川やため池	・夏の遊びの主要な場 ・泳いだり、魚とりをしたり、思い出が生き生きと語られる
田んぼや畑	・手伝いの合間に遊べるもっとも身近な空間 ・ドジョウとり、ヘビとり、野菜の盗み食い、スケートなど
山	・草刈りや薪とりの際に、アケビや山ブドウなどの木の実とり、山菜とりなど
道	・スキーやソリあそび、凧あげ、竹馬、棒ベースなど
お宮やお堂の庭、近所の軒下、学校など	



最後に須賀 丈が「信州の野草地～その生き物たちのゆくえ～」と題し、里山の自然とそこに生きる生物たちをとりあげ、それらの特徴と保全活動について発表しました。県版レッドデータブックには、里山の動植物が多く掲載されており、なかでも目立つのが、かつての採草地や放牧地などの野草地に多くみられた草原性の植物や昆虫たちです(図2)。また、全国的にみて黒ボク土と呼ばれる土壌の分布と、草原性の希少種の分布がよく重なることもわかってきました。このようなことから、近年、かつての野草地が利用されなくなり、自然遷移により森林化が進んだり、植林地などに変えられたりしたことにより、草原性の生き物たちの多くは棲み場所を大きくせばめられたと考えられます。また信州の場合、火山の山麓など比較的標高の高い場所にもかつて広大な野草地

がありました。こうした環境の消失の背後には、やはり燃料革命以後の暮らしの変化などの現実があります。草原性の希少な動植物の保護をすすめるには、かつての土地利用の歴史にも目を向けながら、市民や行政などたくさんの方が協力して、広い視野で野草地の保全や復元などに取り組む必要があるとしました。

以上のように、セミナーでは里山環境のもつ価値や意味が理解しやすいように、過去数千年にわたる人と自然との関わりの歴史を背景に、近年の里山の変化を位置付けました。その観点からすると、今日の里山環境の変化の多くが、1960年以降のわずか50年ほどの期間に進行したものであり、しかも過去にほとんど経験してこなかったような性質の変化であったことがわかります。そして、かつての里山の暮らしを知ることは、身近な自然の利用と今後の保全を考えるうえで基本的な情報になると考えられます。

発表の後、会場の方から「里山は変わるもの、希少な生物は残されてきたものということを感じる。現在の価値観も含めて、里山はどうあるべきなのか、100年後のビジョンを研究所が示してほしい。」と難しいご質問(ご意見)をいただきました。

これまでの研究プロジェクト等を通して、里山環境の維持には社会、経済、文化そしてさまざまな生物群や生態系に関わる多くの要素の相互のつながり合い、支え合いがあることを実感してきました。そのため、里山の保全をすすめるためには、ある特定の分野による縦割りの発想からではなく、多くの人に関わり、未来像をともに創っていくことが大切だと思います。質問をされた方には、研究所が扱えることはその一部分に過ぎないかもしれませんが、これからもそういう意識をもって、研究と情報提供に努めていきたいとお応えしました。

(とがし ひとし/自然環境部)

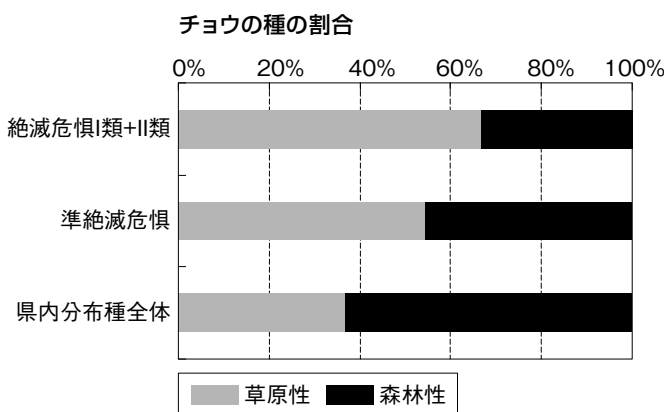


図2 長野県版レッドデータブックにみる草原性チョウ類の衰亡(須賀)

